床夏

廿六

26

一玉鬘ノ卅四

△常夏 十七 廿六 花鳥云以歌詞為巻名但詞ニハナテシコトアリウタニハナデシコノトコナツカシキトアリ源氏廿六ノ六月ノ事也又玉鬘ノ并ト云

一ナデシコ、常夏、石ノ竹ハ三名一草也。唐ナデシコハ金泉花ノ事ト云大和ナデシコハ石ノ竹ノ事也

△イトアツキ日、一 六月ノ釣殿ハ南ノ池ニ臨テ泉ヲツル故ノ名ト云リ東寺ニモ水辺ニ也云京中名跡記云釣殿町六条院光孝帝所六条ノ東ノ洞院ニアリ此物語ニ云ルハ六条院ノツリトノ六条京極ノ各別ノ所ニウツホ物語ニモ此心ニ似タル事アリ舟モヨソヨリシテツリドノニイトアツキ日人々スヾミテ泉ナドテウシタルトニ上下略ス花鳥云源ノ由テスヾミ給トナリ

△中将ノ君 夕霧ノ事 西川ハ桂川ノ事東川ト云ハカモ川ノ事ヲ禁河ト云ノ桂野ト云ハ交野ヲ云ヨシ又狩ノトキノ野ノ事 花云西宮抄ニ禁河堤河右左馬府検知ス葛野川右馬寮検知ス以上夏供鮎今案堤川ハ東川ノ葛野川ハ西川ノ事ニ河云ヒヲノヨル宇治ニハアラテ西川ノアミダニアラバ魚モスクハン右木抑物語道信

△チカキ川ノイシブシ カモ川ノ事 ウツホ国ユヅリノ中ニトリアヘル魚モエラセテ川鮎一籠ハ一コ石ブシ小魚入タルヤラニキナド添サセテオトヾノ御前ニ人々メニテウセサセテケウジテニイルトアリ チカキ川ゾ京極川ト云説モアリ イカヾ賀茂川可成 京極川ゾ六条ヘ流スルハ近代ノ事ノ 石計 石ブシ 鮔 鯡ニ字ニ和名也

△レイノ大殿ノ公達ハ内大臣ノ子共也タキリヲシタヒテツリ殿ニ来リタマフトナリ

△ヒミヅ 氷水冷水ト云ルカ清少納言ニ扇ノ風モヌルク氷水ニ手ヲヒタシテモテサバクトアリ

△スイハン 水漬湯漬ノ事カ花云ウツホニ十二ノ文大臣ナト気タヽイテ後水飯シテニイラセタル事アリ 水飯ハ今テノ廿二ヒメト名付テクフモノナリトニ ヒメホシイヽノ事

△蝉ノ声 河云花山院集ニ カツ虫ハ声モタテヌニセミハイトウスキ身モクルシゲニナク

△水ノ上無徳 水ヲ見テハスヾシキモノナレヒモアツサハカタクノ水ノ徳モナキトノ事 清少ニモ延気モノ夕テノ方ニヨル船トニ

歌数四首

△いとあつき日ひんがしのつりどのにいで給て
すゞみ給。中将の君もさぶらひ給。したしき殿上人
あまたさぶらひて、にし川よりたてまつれるあゆ、ちかき
河のいしぶしやうのもの、御まへにてうじてまゐらせ
まゐらす。れいの大殿の君たち、中将の御あたりたづね
まゐりて、ねぶたかりつる、をりよくわたり給へる
ものし給へるかなとて、おほみきまゐり、ひ
みづめして、すいはんなどとりどりにさうどきつゝくふ（イソカハシキ心）
風はいとよくふけども、日のどかにくもりなき
空の、にし日になるほど、蝉の声などもいと
くるしげにきこゆれば、水のうへむとくなるけふの

わかはしさゆむかしのけはひはゆかしさまでなん
やとそよらかし思へまいらせうしなこゝろはいかゝび
などもすさましくはかなくおもしろかるこそあらう
くるしけれとやはかなへすかはりのさひとくえ
うるうるむかしのひとゝのぬほとなきりて
よはおみまゝこれを清世りあらむすのはし
めはるしく猶さきしめぬへきかん事語はせ
所へなふとみくもよなびかさなんちしてきこえんれ
すもおかはのなしやみとのあまへ心めはしき
事とてうちいて聞こえん物語もおかしこ
まわるなゆうゝてこゝにいとすゝしきかうらんよ

近江ノ君ノ丁ハ内ノ侍従ノ娘自出タル云ハヘコトカトシ爰多分ミテ初テ出入ス

内ノ爰ヘ行ハ宣ノ巻ノ末ニ然ハ春トニ入シ内ノ爰わ沈ヲ侍テ近江ノ君ト云女内ノ娘名ト名乗カコトシ親トシ母ハ分ルト云女シトシカコウハ野ヨルんシシラデモムサシノトイ六カコツメレヌヨシカソコツハムラサキノユヘ

世はなをなしはかはかふるひ給はゝでさえしす
さやおとこの心はほの人のむねめたてまつて
しはよ給とまた人なんはわしましとすやと
弁おもとといひ給へたましくえうさまでいひなす
べき事ゆゑもわかくかしこれまのこ給をひ夢
かくるしれゆるをたのきてつゝくるものの戒なん
かういふべき事あはとなのまた斎院は中将の
斎院になんいとつきて治ことふさやうにかまへひぬ
べきさふしやあはとはまかふらひはいなゐは
しまはいえさわかれはさまもの浄めつしき
世のさわりなむ人ゝもし給ふることのうち

イト多／多メト云｜｜　内フノ子

好忠集　ルイヨリモヒトリハナレテ飛雁ノ友ニシクルヽ我ゾカナシモ

ことにひとのためおのづからそんなるわざに侍りけ
れときこゆまことなりけりとおぼしていとおほか
めるつらにはなれたらんおくるゝかりをしひてたづね
給ふがふくつけきぞいとともしきにさやう
ならんもののくさはひ見出まほしけれど名のりも
ものうききはとや思ふらん更にこそきこえねさても
もてはなれたる事にはあらじらうがはしく
とかくまぎれ給ふめりしほどにそこきよくすまぬ
水にやどれる月はくもりなきやうのいかでか
あらんとほゝゑみての給ふ中将の君もくはしくきゝ
給ふ事なればえしもまめだゝず少将藤侍従とは

清キ月モ水ニゴレバ影ノクモル如ク内フノ御子ニテモ下腹ナドハ姿アシキモアラント也

アソンヤトハ夕霧ヘ源ノ詞也雲ヲ内フノユルシナキヲ下心ニテ

近江ノ君ト雲井ト兄弟ナレバカザシト也　我宿ノ花トタノムヨシノニ君シイラバオナジカザシヲサシコソハセメ

いとつらしと思ひたまへりあそんやさやうのおちばを
だにひろへ人わろき名の後の世にのこらんはおなじ
かざしにてなぐさめんになでう事かあらんと
ろうじ給ふなりかやうのことにてぞうはべはいと
よき御中のむかしよりさすがにひまありける
まいて中将をいたくはしたなめてわびさせ給
ふつらさをもおぼしあまりてなまねたしとももりきゝ
給へかしとおぼすなりけりかくきゝ給ふにつけても
対のひめ君を見せたらん時またあなづらはしからぬ
かたにもてなされなんはやいとものきらきら
しくかひあるところつき給へる人にてよしあしき

くはしめもけざやかにまでりやしみもそけちうる
せうる事も人によらとなふおとゞなきはいうりふれ
しかるおなすらんとも覚えぬさままてこそ君は
さしもさるようなるまえにおかさるしい
きびしうはもてなしてんとおぼすなりつきゆく
風いとまほしくてかへりうくわうき人々は思ひ
ある心ばへはうちとけまじう見えはまんなやうく
あやうの中に心もいひもそれぬべきよりひかもなかに
くわやこそましての秀よりかわこへば春たちみへな
はとなりあはれならへたうれ時のおほやけもどとも
なればおほかくしく何ともかくまへられぬなり

おとゞは君をばいとゞいそぎへとてものびてかね
侍従なども并でまうで来たるいとゞけざやかにほし
げに思へば中将のいとこどもの人まそ并で
あぬむきらんなおりしこの人々いみあはおりふしなれば
なろしなかくさまよき人はづまどのうらなる
あどいやどくおさゞひはしゆかしく覚ゆべう
めぼすなるいはこの家の光をうちゝくのくさく
しき雅わはいやゝ世に任ておもくまうなん
いひ思なすまめぶのしく物すめるとさればかめ
人のすきごとひよろむよはまるうーめくて
ものしおへといひてかさやうなる人見気色の

ナデシコ 玉カヅラニタトヘタル帚木巻ニ
山ガツノカキホアリトモ
オリ〳〵ハ哀ヲカケヨ
ナデシコノ花 此哥モ
玉ノ[illegible]
[illegible] 午[illegible]
金銭 白氏
架[illegible] 離

ふかき河さしをもさきらむなとさうしくさやきまめしに
給ひ思しかいなんておふん[illegible]しし人なとなと
はしめききもの給[illegible]まへりみたれよりしおお[illegible]
なとも人はき給りはなそしられさまとくの
なるりのやまとのまをいかきなるよしもゆひ
おしてささみされるゆふりんいかしくみゆられ
うちらわて心のましかも[illegible]ぬをあやさまめひ
はし[illegible]ふいふうちくともみわかなし心もちいなとも
とわくくは[illegible]てもうめやまけま左中将はまして
いうしをほまわてこ[illegible]をはりしたけわひまさりめて
みゆいかなみやなとは[illegible]まさりしるなくもかさし

サイバラ呂 我家ハトバリ帳ヲモタレタル
シマヤキミキニセムコニセムミサカナニ何
ヨケム 源氏詞玉君夕
ツト云詞ニテノ事也
[illegible]
[illegible]

さるかちなとなとの宰相中将は君はかくまた中ゝも
すくまてもありしをまなめまよ御へ宰中将をいとひ
給ふはかしくいかゝあけまゝうち物なくきこゆく
しのめは中よわあかつきいてまちまて給ふなとすこと
まや中にかけまひは浅ますさなをいかにひとも給わかな
なにとまて給ひそすれはちなかさてりやされ世[illegible]は
給ひりしうれたくおきなひとちむれひとききに
まつ給もとけと年月へてそ給ふまつ給む[illegible]の
はしさなわさ[illegible]うなわ世のきこえてう給しと
おもいまゐはまつらぬかまてこてりまうきたまへ
らんよう給めたりはあらなきしやなとうめき

和ゴンハ神楽トサイバラ計ニアルヿカ昔ハ和ゴンニアハセタルガ近代ヘテナキカ遊ニ今モ必アルヿトし玉ノ前ニアルヲ源ノ又メヽヘバ能シラメテヲキ琴トナリ

リチハ秋女ノテウシ也

月比ハ玉ハコトナドハナラヌト思ヒタルニトし

琴ふはうちはへりんのめてあはれ御中なれ
たおせきて琴にもおやみえてれそてまほしんすの
いはとあまきにはうれふかぶきくまだ是月もなき
ころなれバとうろにおほとのあぶらまいれりなを
けぢかくてあつかはしやかゞり火こそよけれとて
人めしてかゞり火の台ひとつこなたにとめす
をかしげなるわごんのあるをひきよせてかき
ならし給へバりちにしらべられていとよくなる
琴もすこしひき給ひてかやうの事は
御心にいれぬすぢにやと月ごろ思ひおとし
きこえけるかな秋の夜の月かげすゞしきほど

カラコトハ廿五絃ナレバコト〱シクシドケナク女ノヒクハアシヽワゴンハ六ゲンニし

いとおくふかくはあらでむしのこゑにかきあはせ
たるほどけぢかくいまめかしき物のねなりことゝ
しきしらべもなしやこの物よさながらおほく
のあそびもののねひやうしをとゝのへとりたるなん
いとかしこきやまとごとゝはかなくみせてきはも
なくしおきたる事なりひろくことくにのことを
しらぬ女のためとなんおぼゆるおなじくは心とゞめて
物などにかきあはせてならひ給へ
ふかき心とて何ばかりもあらずながら又まことに
ひきうる事はかたきにやあらんたゞいまは此
内のおとゞになずらふ人なしかしたゞはかなき

左ノ手ニテハツカフヲバ
ヲナト云右ノ手ニテ
ハナニテナラスヲスガ
ガクト云只ソトナラ
ス一ゝ前ニ委

おなじすがゝき乃ねによろづのものゝねも
こもりかよひていふかたなくこそひゞきのぼれと
かたり給へば（コレヲサヒキ給ヘ）ほの〴〵心えていかでとおぼす事
なればいとゞいぶかしうてこのわたりにてさりぬべき
御あそびのおりなどにきゝ侍りなんやあやしき
山がつなどの中にもまねぶものあまた侍る
なればおしなべて心やすくやとこそ思ひ給へつれ
さはすぐれたるはさまことにや侍らむとゆかし
げにせちに心に入て思ひ給へればさかしあ
づまとぞ名もたちくだりたるやうなれど御前の御

フンノツカサ　巴云ワゴン六
伊ー伊ー伊ー二神ノ
代ヨリ出来タル器ト伝ヘ日本紀ニハ不見又天照太神天ノ岩戸ニコモリ給神楽ヨリ出来タルト云リ寂初ニハ弓六張ヲ双テ弾ヲウチ十二シヽ
ヨリワゴントテ云モハツクリ出ス名付ト云今ノ世ニ琴ヲロヨスルトテ弓ノ弦ヲ折カルコヨリオコルニヤ　フンノ司トハ男ノ官ヲハ図書寮ト云女官ヲバ書司ト云
和ゴンヲバ書司ノ女官預リ申ス名ヲバ旋タテト云又打目或字多ノ法師ナド　和ゴンノ名物ゝ我国ヨリ出来シタル器成ニヨリテ

あそびにもまづふんのつかさを召すは人のくには
しらずこゝにはこれを物のおやとしたるにこそ

何ノ楽器ヨリモ上ニシカルハ一之サルニヨリテ是ヲ物ノオヤニスルト云リ此ハ内ノオトドノ琴ノ上手ソシムトテ云リ花ノ説ナリトニニ
其中ニモ、――内ノハコトノ上手ナレバ玉モ親内ノ手ヨリナラヒトリメニハヒトシホオフランナリ

あめれその中にもおやとしつべき御手よりひき
とり給へらむは心ことなりなむかしこゝになども
さるべからむをりにはものし給ひなむをこの
ことに手おしまずなどあきらかにかきならし給

六条院ノ内ノ時ニ未タ
ニヘ氏コトナト引給フハ
ナキトナリ

はむことやかたからむ物の上手はいづれの道も
心やすからずのみぞあめるさりともつゐには

上手ハ此ニテ萬手ヲ
オシムトゝ

きゝ給ひてむかしとてしらべすこしひき給ふ
ことついいと二なくいまめかしくおかしこれにも
まされるにやとおやの御ゆかしさたちそひて
この事にてさへいかならむ世にうちとけひき

後ニハ親子ノ名乗ニ
テコトツメ給ハントゝ
コトツイキビウ三説
源ノコトヒキ給姿今
メカシキトナリ
ツキ　人ノカホツキ
ツイ　其姿
サイ　其事ノ容イヤ
花鳥ニ委　但シ久ハ古来
シヒサルトコロトテシク
ヲ當流ニモ用ヌリ

スキカワ　サイバラ　スキカハノセゝノヤワラ手枕ヤハラカニヌル夜ハナクシテオヤサクルツマ
花ニ云ヤワラメトハ手枕ト云ニテ下ノ文字ヲ略シテ云リ但ウツメフトキニカヤウニキヽヲ久ヘ
侍ルニヤ又オヤサクルツマ
ニモヌキ川ノ詞ニアリ
玉カウラノ君ノ一ヲ思ヒヨセテウタヒタマフニソウナワラヒ給トハ手ルニ加ラミ
但シ亥ニテ源ウタヒ給ハ玉トキトケテヌル夜モナキトノ心可成
オヤサクル妻トハ
内ヲ源ノサケ給フ一カ又源ヲ玉ノサケ給フ一カ可成

謡ひ給ふもさ[illegible]など[illegible]給へ[illegible]せての
[illegible]なほりしまうるひ給ふおやさくる
つまはすこしうちわらひつゝわざとなくかき
ならし給へるすがゞきのほどいひしらずおもしろく
きこゆいで弾給へざえは人になんはぢぬわざ
さうふれんばかりこそ心のうちにおもひて
（想夫戀トキカ　女ヒノニ遠意アリ　戀字唐ニハ憐字ヲ書ク代ハ一ヽ昔ハ慕ノ字ナリ一ハ或アカ誤ニハ戀ニ書シト河抄）
人もありけめおもなくてかれこれにまじりひきあはせ
（物ハナセズアリシニヘト）
たるなんよきとせちに小声きこえ給へどさる田舎の
くまにてほのかに京人となのりける古王孫君女の
をしへきこえければひがことにもやとつゝまし
くて手もふれ給はずしばし弾給はなむきゝとる

ことゝもやと心もとなきこれにことよりわざ
ちかうゐざりよりていかなる風の吹そひてかくは
（琴ト云コトハ風ヲ請テ音ヲ出ス）
ひゞき侍るぞとてうちかたぶき給へるさまほかげにいと
うつくしげなりわらひ給てみゝかたからぬ
（料ハ耳カシカラスニヨリ風モ吹添ト　玉ハ耳カタキ方ヘハ外ニハヌトし　或玉ノ耳トシテ玉ヲヨシ）
人のためには身にしむ風も吹そふかしとて押
やり給へはいとこゝろやましゝ人々ちかうさぶらへば例の
たはふれ事もえきこえ給はでなでしこをあかでも
（前ニ君ヲ見ル心ナリトオリトラズト云ニテ）
この人々のたちさりぬるかないかでおとゞにもこの
花ぞのみせたてまつらん世もいとつねなきをと思ふに
いにしへも物のついでにかたり出給へるも
（雨夜ノ品）
たゞいまのことゝぞおぼゆるとてすこしのたまひいで
（夕顔ノ事ヲ）

玉ヲ内ス〈ミセタラハ夕白ヲ尋侍ハントナリ
野々宮ヲ合 判ヲ順 秋モヤシトコナツヤシキ花 色ヲウタガヒヲル露ノハカナキ 夕白ノ年ニ 山カツノ——紫ヨリ ナデシコトハ玉ノ事〈
タラチネノオヤノカウコノ ミユゴモリイブセクモアルカ 妹ニアハズテ 詞ヲ引タルナリ
内フニアヒタリモイヤシキ カキホニ生タルカナレバ内フノミテモタノイ近ク見タ ニフマジト〈
コザラマシカバ 法ヲ判ノ言ラ スベシ未勘、玉ノ云 コズハムヲサニイト〈

心のもいとはづかしきなり。
なさしこれとこなつしききをみぐるしとの
あさゆふを人やたのまん世にこれしらぬ乃ほどなりしさま
なむきのゆおもわをきこえ給ふしうと乃なさきてこうち
あけきそ
山の川乃のおほよ給ひしあてしこれもとの
給さしをたまへりんしのんえの秋を参きこえなり
たまへんふさまけりいはしな信しかりの屋かみわ
こざるまじうばとうちも世じ給そいはく志さ
傳うう給いるるしきまでえ志のびり信まじか
おぼさるがうわ給ふす見あまりわうちまなる人の
みなわとくのめ信べきなどいきう給のおかくおかし
やぐめそさ給べきすをしも信く信給この（か）よ
いぬもわなしたくこの信ことの兄阿をくれ傳
さう給よふしてたわあずかくはいなきわざ給して
屋しうる給ぬ物給りひをほるんさ思りじとそこ給の
まうくやまあるば世の人のそしまいりん事乃よ給
う給しさ給こまがたあばさ給物まてこれ人の傳
たあいはもおしう給でしあまずわなきさ信こ給ざしと
いふとも紫むれうへの傳おぼえ小なる姫ばうかそ
我御こ給なずるえお給まじうおがしきわさわ
さてうれしおとかのほうまてハ何ぞうわうハ何くん

わかめひとつよりひとよわかれことなまゐらんひとつれ
何まさぬ中小にしぼらりむすゑまそは柏の葉し
うれしけかなこゝろある事なれ給ひきこえ人の
すさまじくて思りんまはれどもなべてのすぢ
人はのゝおほしまゐるりいとくおしうてかへや
大将などあり御心しくまうさてえるまゐ
いさなひとわてハ思ひもたゝかんやいふうひなき
まそ人ふもまてんとおぼえおわらくもあわさまぞ
わすれてハおかちをみ給ふせ御むとさへ
給ふりさんなくはきてわりやありなまゐわ給
兼ゐもりしめし御むく御なくうして御心給しが

ツクバ山ハ山シゲヤマシゲケレド思ヒ入ニハサハラザリケリ
平中 日本紀

あくてもみたるうめうし給め大義はこ給ハあらわ
うわと広りくめなきていはじしもうしとみきこえ
給りはさ御へまお御いくへもなまてくしいうしぬ
わとよ再しありしなどし給て見るまくりおい
ぎやうぼふかわ御さわたまへまだなるさでおえ
すぐれきりじをおぼしりへこ御まのこさそこしなぐら
うしぼきりへてこ御べ義おわくはうちきのび
物をも実へなぐさみなんやうくまぶ世なまぬ雅乃
ま侍らはしさこゝろ給ぐるしうハあ御へはまゐ
後の御りもわつるきとも数乃ん後さわかさあ
いと知しきおりひなくてわのまゐ給も思ひいまなが

さげすともさりけれとかしかりしよなもいと
かしかゝぬはこそなれやいとよくも人なれけれは
思ひけらんもくるしうこそむかしのめに思ひすぐさむ
すのとぞうちなまりつゝ義ずよげりはむつ
うしき御うららひなれる女のおほいとのは
これはゆめみえめれ事なる人にゆるさるゝひめ
いひ世にもぞ聞えいふときこえ給ふまゝ将の事の
ほいでにおかなおとこのさうことやひとし
あとかたわききこえけれはわゆひおそきしかこに
こゝろは年ごとにも哀れぬ山の月の宮すみへ
御そものめうしうへおきへのかとき給ふぬ

おとこのゆめやしくこれわかれのありとはえてこそ
めでたおとこしめ給ふやこそまゝ覚えておほんちし
くはしの給ふあはりのしの尾をます人は
いかにをしもなく恐りひえゆはむるよなん侍る
無部のくんや花やいかにとぞあそび給へる
とある何がはさそふにそおもへし世なん人にはえそかは
ねめはとやかへいそそれにかれおもしろの御
むかしのおとこの人ふたりわれおもてのいたしきぞ
人のあつかひされこそあはせあまなりけれ
さしもすぐれ給ひし人にしきほどなるは年に
ゆくてなきしおもしろくれちかはほのぼのとこれ世よ

すぎ給へるは方のおぼえにはまさりてもいみじき 紫上
いつくしみあなかしづきてけるはいはなりし世と思
ほかめでいささか物えなりしをおほかたのたまふすくな 源三子スクナキ生付トヽ
なくてんりとのきこえめしまとまいりけるなめれど
おほしのおもとのうへ出なかいとものさなかせたり
ゆふぎりをうそあらはうあらんとおぼゆるしけの
いま姫君はちうをばえさちの院こゝもあらじや 王 実ノ
はさまにいとこゝしきあな院にはいまへはへりて 源ノ中将ヲ
まそないはなうむよらいひおはしましさていらせ ヨヲバイカヾカシヅキ給トナリ
さだめらぬならぬそこぞうまはりしえ給りんあらし
まわとわわさて帰なりもまう人がうもわうさく 行跡ナドモスグレタルトヽ カウサク氏ヨム 河武又比ジル三

あなにはあはひなうむうしとの給へはかの姫君の院 ウノん 雲井
ことおもひくちおしくかやうにまつらるにまかせて
なりていはうふ心されさむなと思はうしばいふうし
かうせまし物をとあさくれぞくやぬさびいわゆる
まんざうむかまわいゆはしかゝくおほはなかわわ ヌキリノ
おとゞもさんはよくちいまりの人さい給へはようぞ 源ノ 源ノ臣テアタヘ玉ヒシトノ冬ニハバ
姫君もやうにもなひのえとおぼすまじくもこゝろ 曲 師私 貞 為氏
えさ宮よいらう達給いはこ給屋ましくあむとすぐ
おほしめくらをまくみゆくわもなくうはらうか
いひわたりまう給へるとかねも帰りともに参わ給姫君は 雲ノ方ヘ内 雲井
ひめぎみーたまのへふかどあわうはものひとへを

タラチネノオヤノイサメシウタヽネハ物思フトキノモノニゾアリケル

浅野てみし野へふさ海あたりはしくはみえねど
いはしらうさげよはしげ屋のなかすきたるをばさはよも
いとう侍りしかうし笠なるまつぶしして扇を
もん負まへつ之笠ならなげしうひな紋紋よそうち屋れ
うなはぐしのいとながくさちふくはわら孫どいと
なりしさすゑはよあわ人ゝも抱れうし給りしわ
みしはくお屋にと玉ほとなまはぬとも松ば給い
館りにおふ浅をならし給へまば雲井なまお給もなく
えあげたまへふまかんらうしげ小そばらはまのはり
めふもおやのはぬよはいとさはくしくつ口元のうたて
孫はいさあ災ゆるりのをふせりいとまれそのおき

サアレバトテ力ヲ回カテ不動ノ印ヲ結ビノテイハアシキトナリ

さ海よそはおかとのごもまろ海ひとくもちらく
さふうをぞあやしや女は力をつまよう給ばうひ
しきてまりわたらんなん君給べ浅心屋にくうち精
海ご海よそそなしに海はされなきわきなわさわ
とそいとはらしか力うしめてふどうのぶうり
するんおんつくわて井さりんもふくしうはこの
人かもはまろけど給くも見へぞそふまのし義なども
給きさやうよてもみよまくもら給うはくしれい
あらぬよつぎなわおほさいとくび乃君が殿の非家なる
りし給なるをしへまず給河のるりありし
なたらめそらとくえよゆへもはきしうとく

しき事をかこちしとめぐらうかようおもひて猶
なげけばさもあはれなる事なれど人わらしてこ猶かも（如ノイナド）
ゆるわざかとたてゝなびくいかさとあはれもの
なれば物ひあはれさまをなんかしこの君乃人々なるわ（係ノ別ヿ能ホドニシシ人ノ生ガ一方ヨルホアルモイトシ）（性質道質）
宮ばらんえりいたしーそ猶いむ世のくしぶさう
いとゆゝしけはなどの猶て思ふ後うよみまうんと（雲ヲ后ニ思ヿ）
思ひし猶ちいたりふやうりなわかさあ衛ガ（タキリノヿ）
なまめきゆゑで人わらうまなられしるしまろむかる
なん人のうへのさ歳くみるをきくごとふおもひ
みるま待つゝさうなりしんこと猶なりんきがらん人の（タキリシテ人ニ）
猶ぢとふ猶たりなびき猶う思ふ侍るなど

祢宜言　神へ物申ヿヲ云ガ耳ン祇ニシテ人ヲナビカストゝ
ネギゴトヲサノミキヽケン社コソハテハナゲキノ森トナルラメ

ゆくらうゆゝしと思はく宮へ猶世うはなるまう（雲ノ如才ノヿ）
をもふうり思ひもちてなかくさしあはれとそいと
おもしろう事のさはあかもおもなくて見え（多ノ一ウノサ猶トキノヿ）（ハヤモセデ）
まわりるなどいもの おりひ出る道むね さよわさ
いうじがえばりきおか宮まわをつゝよおがはゞ
なまようをようみさうえたまのへどかくの猶ふ歳が
はかなしふてえわかみえまわ猶りばおもじご猶
小乃蚕のゆきの君をいうふさんはゝのさゝるまむりん（近江君）
あてきそひとうかそしはとてうへしなくらんも
いとうはくさく物がるおもしたやうなわりくて
さらあ猶きたまへばきのこともかしはくべきんおもはうかし（実ノ娘カド）

人のいひなしなるも称す女御のはうさなどふ
ましらひきてさふらふなきこの其小志れいてん人成（人ヲアナヅリグサニ）（コキデン）
いとゝうさはなかわとくいひおとさるゝあちきなきためし（近ロリ）
さいはひなりわすやいはるなどあはしてあ女御の（人ノ気執ニハナキモ大テイナトニ）
君よこの人まんうきんみ給ふうらむるなとさ
おいさうくへ候女房などしてはゝきさいへはき
給て御議ぎよまるおひとくのあとかきあはき
あけうえを給うしてわはは遠やうなりとまし〳〵ひ
はく義こえ給ふあいとよいとさことのおもはなん
中将などのいかにおなくおりひけわらんうおほとふ（柏木）
えんずゆるいふはかりうおけりめおくひ給ひ（不堪 世ノ人ノ云ん）

中将ノアニリホノメニラアリ世ノ人アサヘル可成

カタヘハ一内ノ何カトムサハギメニラヌ近君ノ心ノフリテハヂカヽヤキタニヘル一ナラントヤハヅカシゲニテ与仰女以何し

時はかさりしたなく思ふ備もうさへはうく
蛍のし義もやといひさゝうしかるまきさゝえ給ひはる（花ノテイ）
さ備名志まうあかりし花はなくていとあそり
えんたる梅乃なほうしきさ歳うひて面白き梅乃（花ノ花形ノテイ）
花のひらけさしう人あるさかしけ覚て夕里枕日
うわぎまほく思ゝ給へふか人わことあわり候とみ
まわ給ふ中将乃さはんどうう語りのきたとりあすく（内同 柏木）（前ニ女ハイ 柏八ニナノ後ニアノイリテ）（中将ノ猶トキ利発人トイヘド不足ニカケ人ト以過キトカフノ悔恨トし）（近ヲ中将ノ後出依ヲヨクヤシク内ノ丑ヨ也）
なきあわなど中給もいひ御ゝけあ候人のはおわし
う那屋かて世ほうたのたまわみたくずんおりして（一内ニ）
のぞ義たまの人達はすぞれうつやかまをしりわさ（近ハ不シ内フノ）（不知人）
あきちの君とてさま人候まうの人のお候とすく給く

ニホハ子ドホヽ云梅ノ花ヲコソロモオカシト近君折テナカムル

小賽（セウサイ）五節ノ君ヲ近ノ
コヒ給ヘルヨリハソト
キノ心ニ也

車ニアラザレバ前駆ナドニテモ
先ヲヨブハ近ノテイナル也
シヅノルシニテ其人サヘ
近ヘハケ給ヘ

サレ石ノ中ニオモヒハ
アリナガラケシキルイノ
カタメノモアル哉

河海云過去ノ善悪ニヨ
リテ今生ノ容皃ノ好
醜アリ端正忍辱中来ナド云リサレバ近江君形ナドサスガニアシカラヌハ
罪ヲモキ相ヘト君心浅キサニ也カロゲナル也トミカロゲナリトコ云カト
細ニハ前ノ説可然トアリ

うち給ふ手をいとせちにおしもみてせうさいせう
さいとこふ声ぞいとしたときや（古早カ）あなうたてと
おぼして御供の人のさきおふをも手かきせいし
給てなほつまどのほそきよりさうじの
あきあひたるをみいれ給ふこのごの人（五節）もはたけしきはやれる
御かへしやかへしやとどうをひねりてとみにもうちいでず（大臣ノ心カ小賽ノ事シナラバ）
中に思ひはありやすらんいとあざれたるさまども（アサヘイ）（サレタル心）
したりかたちはひちゝかに（近江君ノ形）あいきやうづきたる
さましてかみうるはしくつみかるげなる
をひたひのいとちかやかなると声のあはつけ
さとにそこなはれたるなめりとりたてゝよしとは

なけれどこと人とあらかふべくもあらずかゞみに（内ワ我カ身ヲ鏡ニ向ヒテ見ルニ似タリト也）
思ひあはせられ給ふにいとすくせ心づきなしかくて（内詞）（近江君へ）
ものし給ふはつきなくうひうひしくやあらん
ことしげくのみありてえとぶらひまうでずやとの給へば
例のいとしたどにてかくてさぶらふは何の物（近江君詞）
思ひか侍らん年ごろおぼつかなくゆかしく思ひやりし
御かほつねにえ見たてまつらぬばかりこそ（内ワノ）
てうたぬこゝちし侍れときこえ給ふげにみにちかう（内詞）
（内ワシヅ子ニヽヌハ双六ノ能キ手ウタヌ心スル上取ナシ給ト也）
つかふ人もをさをさなきにさやうにても見ならし
たてまつらんとかねては思ひしかどえさしもあ
るまじきわざなりけりなべてのみやづかへ人こそとあるも

オミシオノツボ
此大童 小便童ノ一也
小ベンツボ取アリカフ役ニ
教ヨ召ツカヘド、内ヘフノ
此女ト思ヌラバコソイトヽ

うちはもせめぼりしたちまじらひて人みえて嫌も
めなもかなしびしもとめぬもみなまばん座にる
座のめまされずふすみ人の事どもめすみ人みに存じ
志て海にきえふなれば御やりうり乃おもてふさ
あるたびひおかすめわましきとの孫さし侍る涙
氣色の遠げりし我者志てば猶かうはことくくきく
思ひたまへてまじらひ侍らばようとこ絶世つるめ
おかみお木ばがとわ小も侍つるまつわなんと哭し
たまへばえりんじたまふそうちわつひ孫て絹た
うえしうぬ座くなつてかくまいらがりおへふ
おやかけうぜんのきつ孫のつぞこれ物乃孫者府を

法花云若得為人聾
盲瘖瘂讖斯經ッ
故獲如此罪云々

妙法寺ノ別当 近江国
ノ寺此別当早云々
人ト云

ほうしのとめて我うをきまへきつばぬ乃ちものび
なんりし堂をこめお孫あとぞすてかしゑんての孫
志るのおどりこうい侍るめおさなく侍し時ぶうま
母乃ほとけふく南しうわなしへ侍しぬ法るの
庵たうたとこのうぶやに侍るべく所あんもみとなん
数まうしげもゆつのでこれ志をさとさやめ侍つん心思
きはぶ方もゆと侍りの志孫ふりの先たわとみ孫
それんちかくいるまなちふわく孝大とこもちあ頼ぶ
なりつまけ法たりまれ法花のむくひなすつつ城しふと
どもわとず大ぼうせし迷乃法こふもかうんため寺
あし堂乃孫てこなすするほうしけるおなはる

廿九へ几セキル三ヽ上思
内カラ廿九へ段タヘトノタ
ニラ〻

御まのゆかりまへらんまうずのしけまいのふか（廿九へ日君ヲ几ラレニ）
さだめてかくあやしききりひもさずまどむかへ
あさりんゆらにおかし人〻あまりさみつきいひちう
さむすとおぼしのへし給物かう女御の思よ
ものし給ふ給時〻かうふ余りてひとのはかは侍ま
などもみなまてあまりへおし〳〵となるすなさ人也
をのかうら人にまじらひさかうたかなまばさでも
わかぬしさ給してもみえずわおぼなむやと
のあまりへまいとられきすにこそ侍ふなれたゞ
ゆかでもかく衛かさくにうまどまん
水をなんそこにてもさあてゝもゆかしう給なます哉

法花経提婆品云採菓汲水拾薪設食
ホケキヤウヲ我エシ一ハ
薪コリナツミ水クミ
ツカヘテゾヘシ

思ひ給へけるゆゑもあらずはゆるしたまはゞおほせ
かゝいみじき見ものつかうまつりなんといひしよかるに
ゆまうしきへつまいかふうひなし出おかして
いとしのおわたちさたきゞひろひ給りとも菜わ（水汲ニ対シテ面白ク）
給ふむたゞりれあへりのりこたえん法の師ずる
と残をハゆる座に事ありの給なをすをもしつらひ（ハザシ云）
おぼしき大臣ゆる巻〻母不丹にもゆるしきさまぐる
独くしく華座をかな修侍ましてあか経巻乃
人みなゆくき御くさをもみえつるてゆるよ
女御どのへは宮わ侍らんとゆるまでは御らしき
内などやゆる座うらんすいしく〳〵たへくいはれのは

能日ヲ几テ二条ト云ヤレト

さ思えれば給ふりてもと乃語ひそくわくわ給ぬ
よ義四位五位たちのいはき事してうちこゝろよ語
みもいとりの先しきはいきをひあるをかんよく里
きこえていそてはふめでたのまゐ御おぼえりし里
ゐるたまなりしおやしきこ家よねひ出かなりと
乃たまへえみきもちはまのわこととくえづりつしけ
よ能これはすみよ語しきかやの相りひりしぼん
りきたづまおられ語ばまうしといふもまわおしや
まんの春此人のいふこと座ふわ語いそめづまゝし
いまいひとくちりこと氣かまぜしまうわなやう
あはべきかよこう何めまい此りゝくまち語のかやまぬ

くまずぶはいきやうばはてうちとけうかまたは
さる人のさりおかしぶはえゆはさまたわたゞいと
ひなびおやしきしも人民中小なひ出物へまで
物いふ詞までもなくあはゆくむきこと氣せと
のど座かりをし志せめていひいざしさなた
う也きくえてごとに覚えおしかゝぬ欲がるを
さはむこゝのはうひはよくしきて乃こゝ思ふを
まとれ息おしみたる詞まりうちびしさなる
ふかかれちおれぬおどの内きてわたおしよ
なわとてもとまりし心ふのくよしおほ事様
いひぬもわたもよ語しき出つちおこんともいえぬ

おぼつかなさは海よの程ばかりこそこはく
しるしとぞたゞそこに我まゐりながらあふひなく
めれとのみさうらふよなるひとなみよりもなけし
いとあやしきやうなれはかうかはいふうひ
なくはかりのみえうちはまつりとは思ひ給
くちとくうちはやきなどしてなど
まいらまほしきとのけんたんのあいたる物
さがなものは我がをさかさまうでんにはしきかき天
下おほかたはともかく御かたくしのすきなうもて
なしつんまはさのうちふはそのなんなとの程
御しおぼしれかどうならなわやまのはしたき候

人ニヒヌ思ヒハナゾト
アシガキノマヂカケレドモ
アフヨシノナキ
立ヨラバカゲフムバカリ
チカケレドタレカナコソノ
関ヲスヘケン
シラ子氏ムサシノトイヘバ
カコタレヌヨシヤソコソハ
ムラサキノユヘ
テンガチ 筆勢し
何ニハ真字ノニジリ
タルトアリ
ニクサノミニスダイケン
子ヌナハノイトフニハユル
モノニソアリケル
アシキテヲ花ヨキサニ
ミナセ川ソコノミクヅノ
数ナラヌトモ
花云古今 スルガナル
田子ノウラ浪タヽヌ日ハ
アレ共君ヲコヒヌ日ハナシ
今案此ウタノホセンハ
イカデアヒミン七字ニアリ 大カタノ歌ノテイハスヾロナラムワラチタル可成
作ニ無心所着ノ歌ノテイト可申ニヤト

あし垣のまぢかきほどにはさぶらひながら今ま
で影ふむばかりのしるしも侍らぬはなこその
関をやすへさせ給へらむなど知らねどもむさし
野といへばかしこけれどあなかしこやかしこや
と点がちにてうらにはまことや暮にも参りこ
ん思給へ立はいとふにはゆるにや侍らむ
いでやいでやあやしきはみなせ川にをとてまた
はしにかくぞ

近江君
草わかみひたちのうらのいかゞさきいかで
あひ見ん田子の浦浪大川水のとあをきしきし
ひとかさねにいとさうがちにいかれる手のその

三文字長ハ下長ノ心 又ムサくトテ二ナガキ二說

何ニ云分ヲバ料紙ノ色ノ花ニ付ヿ也青キ紙ヲナデシコノ花ニ付タルモナデシコノワカバノ色ニカヨヘルヿ也モシスナデシコノ色ニ似カトナリ

すぢともみえずたゞよひたるかきざましもなかりし
なのりまはなくよしげなるわざのかどり
ぎやうよはしぢかひてたふれぬべくみゆるをうちゑみつゝ
はしぞさひげなるいとほそくちいさくまきむすび
てなでしこの花につけたりひすましわらはしも
いとなれてきよげなるいままゐりなりけり
女御の御かたのだいばんどころによりてこれま
ゐらせよといふしもづかへみしりて御
きたのたいにさぶらふわらはなりけり
とて大輔の君といふもて参りてひきときて御
らんぜさす女御ほゝゑみてうちおかせたまへるを

中納言の君といふいとちかうさぶらひてそば〳〵
みけりいといまめかしき御文の気色にも侍るめるかなと
ゆかしげに思ひたればさうのもじはえみし
らねばにやあらむもとすゑなくもみゆるかなとて給へり
かへりごとかくゆゑ〳〵しくかゝずはわろしとや思ひお
とされむやがてかき給へとゆづりたまふ
もていでてこそあらねわかき人はもの
おかしくてみなうちわらひぬ
御かへりこへばおかしき事のすぢにのみまつはれ
て侍めればきこえさせにくゝこそせんじがきめき
てはいとほしからむとてたゞ御ふみめきてかく
ちかきしるしなきおぼつかなさはうらめしく

万葉ニモ無心所着ノ哥ノテイアルヽ四ヶ國ノ名ヲヨミ但此ヨリニモ一ツノホ存ハアルヽ立上ヨトヨムヽハコザキ 筑前ノ名所也

立上ヨノイハサス不知ミウトアル計ヲ悦ナリホワムやけ君ハ狂言ナリ

ひさかたなるすゞのゝうみ乃はまの浦ノりなゝ
なかいそよりこさきの松とうちでゝすみきこゆれば
はこうるて咲しハふえぼうれふもきやうひかせ
やまみゆるいたゞきわがひたまはされは中将きりん人
わさまんへねわかんとそとしはしみそいざし近江
かくらんそおしの箔くちはゞ座のはとの竹へ不識
とそゆとはまのへたるたま義ものしをあゝ義士め
みりまんへまべゆといふも乃いゑおりうふうい
つきてのみをはわはくろひたまへ咲さまかくこり
ゆぎうくしくあゆぎやうはぶすわ羽はね前乃などし
さしすくいなすともわからんし、